

中国共産党 野望と謀略の90年

日本を騙し、利用し続けてきた 「人類の悪夢」

戦後最大の危機「60年安保」を激化させたのは中共の諜報
工作だった。戦前から続くその脅威にいつまで無策なのか

京大大学教授・なかにし・てるまさ

中西輝政



日教組への秘密指令

このたびの東日本大震災は、「戦後日本最大の危機」「国難」とも言われている。確かに自然災害としては未曾有の被害を東北にもたらし、被災地の復興、また大きく傷ついた日本の国力の回復には多大な時間を要するであろう。ただそれは、舵取りさえ間違わなければ国家の体制が覆るほどの危機に直結する性格のものではない。その意味で、私にはこれが「戦後最大の危機」だとはとても思えない。

では、戦後日本の最大の危機とは何か。それは「六〇年安保闘争」以外にはあり得ない。一九六〇（昭和三五）年五月から六月にかけて、日米安全保障条約改定に反対する社共系の労働組合員や、全学連主流派だ

った過激派「共産主義者同盟（フント）」を中心とした学生たちが連日、多いときで十数万人、左翼側の発表では三十万人もが国会や官邸を取り囲んだ。彼らもしあの時、本気で実力行使に及んでいたら、日本の民主主義体制は根幹から崩れたかもしれない。現に、当時の岸内閣は自衛隊の治安出動・災害出動ではない！を繰り返して考えざるを得ない状況に追い込まれていた。それには、今日いまだに明らかにされない根拠に基づく深刻な懸念があったからである。「六〇年安保」は、まさに弾丸の飛び交わない内乱だったのである。さらに、「六〇年安保」が日本という国に及ぼした危機の深刻さは、その後半世紀を経た現在に至るまで、日本という国家を歪め続けているということに表れている。すなわち、「六〇年安保」がなければ、日本はとっくに憲法を改正し、国防軍を持ち、本当の意

味での独立国家として、現状よりはるかに「均整の取れた国」になっていたはずなのである。

日本の国民の多くは、それまでは真つ当な国家の復活を願っていた。その意気込みが、当時中学生だった私にも伝わってきたのをよく覚えている。しかし「安保闘争」で左翼陣営の力を見せ付けられると、保守陣営はすくみ上がってしまった。憲法の改正、そして国際社会で国をどう存立させていくかという国家の根本命題を一切考えなくなってしまった。そして、日本の政治に許される活動の範囲、つまり国家としての目標はもはや経済発展しかない、という雰囲気になったのである。今日の日本は、自らの安全をアメリカにほぼ全面的に依存しなければ一日も生きていけないほど自立能力のない国になってしまい、現在ついに大きく浮上してきた中国や北朝鮮、そしてロシアの脅威という国家安全保障上の危機にも目をそむけるしかない国となってしまった。その原点がこの「六〇年安保」にあったことは、今日もっと強調されてしかるべきであろう。「六〇年安保」で挫折したのは、左翼勢力ではなく、日本国家であったのである。

では「六〇年安保」の本質とは一体何であったのか。これまで、岸信介内閣が衆議院委員会で強引に日米安保条約改定を議決したことで、反米の左翼勢力のみならず一般国民も「民主主義が破壊される」と怒り、反対運動が盛り上がったと説明されてきた。しかし、この大騒乱の本質はそんなものでは決してなかった。

冷戦下において中国、ソ連を中心とする共産主義陣営が、日米離間を突破口にして日本を共産化するために仕掛けた国際的闘争だったということが近年、各種の新史料から明らかになってきたのである。

例えば、旧ソ連のKGB第一総局（対外情報局）文書課長だったバシーリー・ミトローヒンが一九九〇年代、亡命先のイギリスに持ち出した「ミトローヒン文書」（それを編集したものが、一巻本として二〇〇〇年前後に出版されている。ペンギン・ブックス、未邦訳）には、KGB東京支局を中心に、ソ連陣営が総力を挙げて左翼の安保反対運動にテコ入れしていたことが具体的に記述されている。例えばアイゼンハワー米大統領（当時）訪日のお膳立てのために来日したハガティー大統領新聞秘書官が羽田空港周辺でデモ隊に取り囲まれて米軍ヘリコプターで救出された事件（ハガティー事件）では、重大な政治危機を作り出すためにソ連がデモ隊の煽動工作を行っていた。また「新安保条約には日本国内での混乱の際にはアメリカ軍が鎮圧に出勤するといった秘密条項がある」という虚偽情報も共産諸国の謀略として流された。実際、こうした虚偽情報が新聞に報じられ、反対運動は一段の広がりへと激しさを増したのである。

つまり、水面下で日本の左翼政党、労働組合、あるいは各種のフロント組織（市民団体を名乗っていた隠れ蓑の動員組織）の中に張り巡らされた北京、モスクワにつながる工作網がフル回転した結果、あれだけの

大動員がなされたということなのである。

ただ、そこで決定的に重要なのは、大局的に見れば、この騒乱には、ソ連以上に中国共産党が大きくテコ入れをしていたということである。中国共産党はすでに戦中から戦後にかけて日本社会の中に工作網を築き、各種団体に広範な秘密工作チャンネルを持ち、これらを総動員して「六〇年安保」へ向けて強い影響力を与えていたのである。

その一端を物語る資料がある。旧日本陸軍大將だった今村均氏が昭和四十一年、自衛隊の部内誌に寄せた論文には、以下のように記されている。

「昭和三十五年の日米安保条約改正の際、五万といわれる全学連や総評を動かし、わが議会や首相官邸をとりまき、暫時政治の運行を妨げさせたとき、中共の対日工作委員である陳宇氏は、わが共産党員である日教組の大幹部である赤津益三氏に対し、暗号電報により六月一日『われわれはこの度の諸君の勇敢なる革新運動に大きな敬意を表する。しかし貴国の革新は、民族をして、皇室と神社とより離隔せしめない限り、その実現は至難と思う』というような、指令を打電した」

〔修親〕昭和四十一年一月号三十二頁。なお本論文のコピー入手に際しては、陸上自衛隊OBのS氏の御助力を頂いたことを記して感謝したい）

今村氏は昭和陸軍随一の人格者として知られ、「聖将」とさえ称された人物である。また、第二次大戦時の名將の筆頭として今でも多くの研究者や歴史家が称

賛と共にその名前を挙げる人物である。長くイギリス駐在武官を勤め、一九三六年には関東軍參謀副長、そして一九三八年には日本の防諜組織の頂点である陸軍省兵務局長に就任しており、インテリジェンス、諜報活動の専門家でもあった。

旧日本陸軍の暗号解読能力は高く、一貫して中国の暗号を容易に解読していた。第二次大戦期を通じて中国大陸で日本陸軍が一度も中国軍に大敗北を喫しなかったのは、そのためである。おそらく、この旧陸軍の能力を引き継いだ自衛隊ないし他の日本当局が中国共産党の暗号電報指令を傍受、解読し、復員後も関係が保たれていたであろう今村氏の知るところとなったと考えられる。従って、この文書の信ぴょう性は高いと言える。

ここに名前が出てきた「陳宇」氏は、中国共産党の対日工作部門の幹部で、一九一六年、上海生まれ。別名「程」一字又は「陳保和」とされ、一九三七年延安抗日軍政大学に学び、一九五〇年代からアジア各国とくに日本の労働組合組織への工作活動に従事し、六〇年代以後、日本の総評や原水禁運動との交流を通じ、ほとんど毎年のように訪日を繰り返していた人物である。最終的には一九八〇年代に全国政治協商会議の常務委員にまで出世した対外工作の巨頭であった。

この秘密指令は、場合によっては外患罪（刑法八一条、同八二条）にも抵触しかねない内容である。今村氏は、この論文であえて日教組幹部の実名を挙げてい

ることから、相当な危機感を持って日本の防衛と防諜に携わる関係者に注意を促そうとしたことが読み取れる。この論文掲載から間もない昭和四十三年に今村氏は八十二歳で亡くなっており、この論文をいわば「遺言」としたいという気持ちも強かったと思われる。それほど、中国共産党がコントロールし、影響を与えていた日本国内の反体制運動による戦後の危機は大きかったのである。

今村元大将の論文はさらに、次のようにも指摘している。

「蜀という国の兵書蜀志中に、『用兵の上は敵国人の心を伐つにあり、その下は城を攻めるにあり』と記されている。…中共革命以来：実に多くのわが同胞が中共に招待され、その人々が『米帝国主義は日中共同の敵なり』などと放言し、中共の進歩開発はわが国以上であるかのように礼賛する言葉を発していることから見、いわゆる敵人により『心を伐たれ』た結果と思わせられる」

心を「伐たれた」文学者

「中共に招待され」「心を伐たれ」た日本人はどうか。作家の開高健は、それを自身の体験として、率直に書き残している。一九六〇年七月十三日に西日本新聞に掲載された「新生国家の精力と魅力」訪中日本文学代表团に参加して」と、同七月二十五日「日本読

書新聞」掲載の「鮮烈な三つの舞台」中国印象記」である（引用は共に開高健『オール・マイ・トゥモロウズ』角川書店より、平成二年）。開高ら訪中団は東京を「安保反対闘争」たけなわの同年五月三十日の夜に出発して北京や上海、広東、蘇州など各地を約四十日間かけて回ったのだという。

まず、「鮮烈な三つの舞台」には、彼らが北京の「民族文化宮」を見学したときの様子が記されている。それを読むと、中国共産党が、どこまでも恥知らずな嘘を公然と宣伝できる体質であること、しかもその真つ赤な嘘に日本人が、いとも簡単に騙される、ということがよく分かる。

「チベットの貴族、地主階級が農民を搾取弾圧したそのやりくちである。…（解放後）チベットは中華人民共和国の中に入ったが中国政府の少数民族対策は内政不干渉、自治性厳守であるから、チベットの制度はチベット人にゆだねられていた」（「チベットの」貴族階級は何万年と続いた伝統をそのままつづけ：反抗する農民にたいしては手カセ、足カセ、鞭でひっぱたき、檻にほうりこみ、サソリの充満する土牢にとじこめ、手首を叩きおとし、眼をえぐり、宮刑に処した）「海拔四千メートルの高地の一九五〇年代の文明がこれである。私たちが何一つ知らされなかった「チベット叛乱」の本質がこれである」

つまり、「チベット支配階級の叛乱を鎮圧し、圧政と虐殺から農民を解放した偉大な人民解放軍」を讃え

る展示だったわけだが、事実はまったく逆であるの
言うまでもない。中国共産党がチベットを侵略し、人
民解放軍こそが残忍極まりない方法でチベット人を大
量虐殺し、民族浄化を進めてきたことは、今では世界
中が知っている。

しかし、そのチベット貴族・地主の「非道の証拠
品」が並べられた展示を見て、開高は実に単純にその
嘘を信じ込み、チベットの封建階級はユダヤ人を虐殺
したナチスと同列か、それ以上に罪深いと論じてい
る。最後には、一緒に見学した訪中文学者の名前を並
べ、この展示を見て「野間宏、亀井勝一郎、松岡洋
子、竹内実、開高健、大江健三郎の六名は全員言葉
を失い、六十五度の茅台（マオタイ）酒を一週間飲みつ
づけた：みたいになだヨロヨロと部屋から這いだすば
かりであった」「人間は底が知れぬ。どこまで墮ちる
ものやら、果てがない」と結んでいる。

「墮ちた」と罵られるべきは、共産主義のプロパガン
ダを信じた単純きわまりない日本の「進歩的文化人」
か、はたまた中国共産党か。いずれにせよ、意図的で
なければ愚かにも罵る相手を完全にはき違えた知識人
の「大いなる過誤」としか言いようがない。

「新生国家の精力と魅力」でも、「日本軍の三光作戦」
という中国共産党の壮大な歴史捏造戦略に基づく虚偽
宣伝を、開高が神妙に信じ込む様子が描かれている。

「日本軍は：中国の町と村とをいっさいがっさい焼き
つくし、破壊しつくし、略奪しつくしたから、その被

害者たちは全土に散らばって生き残り、いたるところ
で出会うことができる」とし、「日本軍に生き埋めに
されたのだが、どうしたことだからか、穴からはい出し
て生き延びることができた」という男性について、開
高はこう記している。

「それらしい、首が回らなくなったというのである。
その人は右向いたり左向いたりするのにいちいち首を
まっすぐにしたまま、体ごと回らなければならぬの
である。しかもかれはその事実を極めて謙虚にひかえ
めにつつましやかに私たちを傷つけまいという配慮か
らか、こちらから聞き出すまでは自分から語り出そう
とはしなかった。その人の古クギのような動作のぎこ
ちなさは正視に耐えられなかった」

しかも御丁寧に開高は「こういうことは中国側の
演出ではないのである」とまで書いているが、当
時の中国で日本の公式訪中団と自由に話せる国民がい
ると考えるほうがおかしい。こうした「演出」は共産
主義国家のお手のものというか、殆ど「国是」「国技」
と言ってもよい営みである。それに完全に乗せられて
しまう開高という人は、ある意味で日本人らしい、だ
が人間の肉身に迫るべき文学者としては絶望的な「お
人よし」か、でなければ内面は教条的な左翼思想に凝
り固まっていたのかどちらかだと言わざるをえない。

捏造された日本の「過去」との出合いは続く。
「北京の革命軍事博物館に行くと、日本軍のピストル
や三八銃、大砲など、過去の侵略の全容のなまなまし

い証拠がおびただしく陳列してあつて、すっかり心屈してしまつた」(傍点筆者)

中国共産党が偽造した歴史と演出で、開高は、今村元大將が懸念した通り徹頭徹尾、「心を伐たれた」状態になつて帰国したことが良く分かる。

開高は「日本と中国のあいだにはまだ正式な外交上の国交が回復していない：過去において日本が中国を侵略、強奪したことについて日本政府はなんらの反省の交渉をしていないのである」とも書き、中華人民共和国と国交を結ぶ気のない日本政府を批判している。これは、いわば頭の芯から腹の底まで「心を伐たれた」ためであろう。およそ文学者らしからぬ、教条主義的な文章である。しかし、日本の有名文化人をして、かく言わせることが、まさに中国共産党の狙いであつた。かくして開高はいとも簡単に「一丁あがり」にされたわけである。

次の文章では、中国共産党が、一九六〇年五月、七月という六〇年安保騒乱が最も激しかった時期に開高らを招いた理由も浮き彫りになる。

「上海で見た記録映画のなかでは、(日米)安保反対の大衆集会に参加した、日本軍の爆撃のために傷ついで盲目になつたおばあさんが青年たちの激しい叫び声を聞いてうなだれたまま黙々と、しかし心激してこっくりこっくりと頷いている横顔を見た」「ふたたびこういう(日中戦争のような)状態を招く危険を露骨に内蔵する安保条約は、中国のひとびとにとってはい

もたつてもいられない激情を呼び起すものである。北京では百万人、上海では百七十万人の巨大な集会があつて：帝国主義反対と日本人民支持を口々に主張し、叫んだ」「中国全土のあらゆる町と村で集会が持たれ、六億五千万人がまさに六億五千万の声をあげたのである」

中国共産党が開高たちを招いたのは、「中国人民は、日本に侵略されて味わつた辛苦が日米安保条約で再来することを恐れ、反対している」と洗脳し、日本で宣伝させることが目的だったのである。こうした文化人や経済人の訪中が以後、数十年にわたつて連綿と続き、大きく歪んだ戦後日本人の中国観を築いていつたのである。

反安保・国交「回復」のダブルターゲット

日本と中国共産党との「交流」は、アメリカ軍の占領が終わつて日本が一応の独立を果たして間もなくして始まつた。一九五四(昭和二十九)年には、李徳全という女性政治家が会長を務める中国紅十字会の代表団が訪日。以降、「人道交流」や「学术交流」を名目とした訪日代表団が続々とやつて来た。

よく知られているのは、文学者で後に副総理となる郭沫若を団長とした中国學術視察団である。郭沫若は戦前、都合二十年間も日本に住み、西園寺公望ら日本のリーダーたちとも深い交流があつた。当時の日本で

は最も有名な「中国文化人」の一人だったであろう。

その郭が米軍の占領集結直後、代表団を率いて訪日したのは一九五五（昭和三十）年十二月で、すでに前年に訪中していた元東大総長の南原繁を相手に、『中央公論』（昭和三十一年二月号）で誌上対談を行っている。政治学者もあつた南原のそこでの発言を見ると、中国共産党、そして毛沢東や周恩来に異様なまでに媚びへつらっていることに驚かされる。「（中国では）革命があつても：我々の学んだ東洋精神というのが、立派に生きておりますね。そういう一つの礼節、習慣がいまでも中国で生きている。：周恩来総理はじめ、若い共産党の諸君もそれを身につけている」「お国の毛主席、周総理という偉大な政治家を持っている国民は非常に幸せだと思ふ」

中ソ抜きのサンフランシスコ講和条約締結を批判したことで、吉田茂から、「曲学阿世（学問を曲げ、世間や権力者におもねる）の徒」と嘲笑された南原の『面目躍如』とも言えるが、私にはこれが、日本人が中国共産党に盲目になつていく「記念碑」的発言のように思えてならない。これ以降、六〇年安保にかけて、媚中の言説が日本国内で急激に広がっていくからである。

そこでなぜそうなつたのかを問えば、開高の寄稿文でも明らかなように、昭和二十〜三十年代の言論界で隆盛を極めた「進歩的文化人」たちが拠つて立つ東京裁判史観に、中国共産党がさらに悪乗りする形で日本

人を洗脳した、ということに尽きるであろう。そして中国共産党は、そこに、日米離間と日本の共産化（つまり中国への従属）という政治目的を被せてきたのである。

一九五七（昭和三十二）年、この南原繁が呼びかけ人となり、大内兵衛や中島健蔵、千田是也らと「日中国交回復国民会議」を結成した。そしてその二年後の一九五九年三月に「安保改定阻止国民会議」が発足すると、南原らの「日中国交回復国民会議」は、この反米・反安保の一大組織に、日中友好協会や社会党・総評などとともに加入している。また岩波書店の雑誌『世界』一九五九年十月号は、日米安保改定に反対する社会科学者らの声明を大々的に掲載したが、その多くがこの「日中国交回復国民会議」のメンバーであった。

多くの進歩的文化人が「日中国交回復」「日米安保廃棄」の二つを目標にしてそろつて動いたということは、この二つが中国共産党の対日工作の主要目的だったということを如実に物語っている。先の開高の寄稿文でも、日米安保への反対とともに日中国交「回復」の二つを同列で論じて立てているのも、こうした中共の工作路線に忠実に従つていたことを示している。

さらに、この中国共産党の対日工作の目的を、この上なく明瞭に物語る論文がある。やはり『世界』の一九五九年四月号に掲載された加藤周一の「中立と安保条約と中国承認」である。もはやタイトルからして

「ズバリ」そのものと言える。

加藤はこの論文で、アメリカ人女性「ジャーナリスト」のアグネス・スメドレーの作品を引用して、「中国革命軍（人民解放軍）の倫理的高さ」を称賛しているのだが、人民解放軍はこの前年にチベットに攻め込み、少なくとも住民十万人以上を虐殺している。加藤自身が中国共産党と同様の破廉恥な嘘をついているような「錯覚」さえ覚える教条臭ぷんぷんとした論文である。

ちなみにスメドレーは、戦前から有名なスパイ・ゾ



學術視察団代表として来日した郭沫若（右から2人目）。南原繁から囁中發言を引き出した。昭和30年12月

ルゲや尾崎秀実とも交流があり、戦前のアメリカで反日世論を煽った人物である。戦後、「ソ連のスパイではないか」という嫌疑をかけられるとイギリスに逃亡し、そのまま死んだ。死後は遺言で北京に埋葬されている。そして冷戦崩壊後の情報公開によって、現在では、コミンテルンの積極的協力者あるいは工作員だったことが証明されている。

以上みてきたように、六〇年安保の騒乱の背景には、何年にもわたった中国共産党の根回しと対日工作の積み重ねがあった。意識的（ウィットティング）、無意識的（アン・ウィットティング）を問わず北京に完全にコントロールされた知識人たちが新聞、雑誌などのメディアを介して、日本国民を驚くほどの規模で洗脳しようとしていたのであり、間違いない強い敵性意識を持った諜報工作活動である。

米軍がキャッチした対日諜報活動

中国の対日工作、諜報活動は「六〇年安保」騒乱の終了後ももちろん続いた。しかもより活発になったのである。

二十一世紀に入り、ワシントンの公文書館で公開された在日米軍に関するアメリカ国防総省作成の英文資料がいま、私の手元にある。戦後の日本国内での中国の諜報活動を在日米軍の防諜部隊が監視していたが、その監視によって明らかになった中国の対日諜報活動

の具体的な内容を示すアメリカの公文書である。それらは時には、日本の公安当局と連携し、時には独自の情報源から収集した情報を克明に分析、評価してワシントンに報告した、いわば在日米軍の対中インテリジエンス活動の生文書である。これが膨大な量なのだが、整理してみようと、岸信介首相の覚悟と決心によって「六〇年安保」の騒乱をとまかくも乗り越え、日米安保体制の維持が決まった途端に、この文書資料の数が大きく増えているのである。

一例として、一九六三（昭和三十八）年夏に在日米陸軍が日本当局から得た情報をもとに、ワシントンに報告した「疑わしい中国共産党のエージェントについて」という資料を見てみよう。同年七月二十九日、「スン」という日本在住の中国人が、日本の代表的な大手企業の労働組合宇都宮支部議長の日本人「オーバ・タケシ」に接触した。「オーバ」は、その直前に北京を訪問して中国当局から金を受け取り、この接触時に「スン」に手渡したのだという。これは日本国内での中国共産党の秘密工作のための活動資金と考えて間違いない（Department of Defense Intelligence Report, リポートナンバー 222000264, 2 January, 1964, G2, US Army Pacific）。

資料には、「オーバ」が訪中前の六月、日本社会党の地元選出参議院議員（原文書では実名を表記）から「スン」を紹介されたことも記されている。この議員は、訪中する「オーバ」のために、周恩来、中国紅十

字会会長の李徳全、さらにはゾルゲ事件に連座して当時は北京に在住していた西園寺公一ら計四人にあてた紹介状も書いたとしている。

「オーバ」は帰国後の七月二十四日、日中友好協会宇都宮支部のメンバーになった。さらにこの社会党議員が紹介状を書いた中国指導部の四人のうち誰かから受け取ったダイヤモンドの指輪（複数）を件の社会党議員に渡したことも明らかにされている。宇都宮市内の中華料理店が、「スン」をはじめとする中国人エージェントらの拠点になっていたことも資料から読み取れる。

同じく一九六四年作成の文書には、中国の秘密工作員と目される中国人が、「長谷川トシゾー」という日中友好協会本部の事務局長と接触したのを、米軍の諜報機関がキャッチ。日本当局に確認したところ、長谷川は戦時中、国民党と一緒に活動し、その後は延安で捕虜となった日本人を訓練していたことが判明したという。米軍の司令官から、この延安時代、重慶時代の彼の行動を徹底的に調べよう米軍諜報部に指令が出されている。

中には、中国を訪問した日本人を案内する通訳やガイドが、訪問者をその後中国共産党の協力者とする役割を担う工作員であることや、日本に來ている台湾人留学生を北京に秘密招待しろ、という指令についての資料もある。米軍が入手した北京の留学生招待指令には「大陸訪問の事実は厳秘に付す」と書かれてお

り、招待が、台湾人留学生をスパイ協力者としてリクルートするための工作活動であることが分かる。

日本に来ていた中国人エージェントたちが、沖縄や硫黄島の米軍基地の情報を探ろうとする動きを確認した資料もある。ある中国人エージェントは、身分を偽装して沖縄に行こうとする直前に日本の警察当局から拘束されそうになったものの、東京・青山の中華料理店に入り込んで行方がわからなくなったということも克明にワシントンに報告されている。

これらの資料は、在日米軍が非常に綿密に中国共産党の諜報活動をウオッチしていたことを物語っているが、一九七三年を境に、その資料が激減しているのである。明らかに一九七二年の「日中国交正常化」の影響であろう。中国共産党が諜報活動を止めたわけでは勿論ない。日本政府当局が対中防諜活動を大幅に「自粛」し始め、米軍側にもなんらかの要請をしたものだと思います。これは、国家としての自殺行為としか言いようがない。日中国交「正常化」とは、まさに国際関係としての「不正常化」だったと言えるかもしれない。

ほかにも、この米軍諜報資料からは日本における中国の諜報活動を検証するうえで重要なポイントが読み取れる。第一に、戦後の日本での中国の諜報活動はやはり、社会党や労働組合など左翼勢力を大々的に手足にしていたということである。第二には、日本人が「日中交流」にあまりにも無邪気に参加していたということである。宇都宮の「オーバ」は恐らく何もわか

らないまま中共に取り込まれ、金やダイヤモンドを運ばされたのであろう。

第三に、日本の公安当局が、中共のからだ非合法活動に終始一貫、きわめて甘いということである。国會議員が未承認国からダイヤモンドの指輪を受け取ったというだけで道義的に許されるものではないし、外為法、あるいは所得税法違反罪が適用されるはずである。アメリカ当局も、日本の当局がなぜ立件しないのか、あるいは少なくともマスコミなどにリークして件の社会党国會議員の政治生命を絶つということをなぜしないのか不審がっているのである。

ここからは想像だが、日本の当局はおそらく、政治家やマスコミ上層部の圧力を感じていて、立件などに動けば自らのクビが飛びかねないという状況にすでにあったのだと思われる。それほど、中国共産党の日中国交「回復」工作は、日本の政界やマスコミに浸透していたわけである。

コミンテルンから中共へ

ところで、アジアにおける第二次世界大戦を今日から振り返ると、勝者は中国共産党、そして日本の左翼勢力であり、敗者はアメリカ、蒋介石、そして大日本帝国であったということができる。アメリカは第二次大戦で勝利したのに、結局中国共産党に大陸の支配権を奪われた。

そして、その後の朝鮮戦争やベトナム戦争に参戦した経緯を考えると、中国共産党は早い時期から、中国国内にとどまらずアジア全域を、ソ連ではなく自らが牛耳る「中国共産圏」にしようという大目標を持っていたことが分かる。一九六〇～七〇年代の文化大革命、八〇年代の改革・開放の時代を経て、アジアの共産化という目標は、経済や軍事力の優位による中華帝国的な「覇権的支配圏」の実現へと変容した。しかし、人的なネットワークを秘密裏に張りめぐらし、諜報や秘密工作活動を通してその国の体制や政治状況を内面から変えていく、あるいは中国共産党の利益のために、その国の政治や世論を操作するという手法も一貫している。

ところが日本人はなぜか、戦中も戦後も、アジアの共産化、そして日本の革命運動に手を突っ込んでいるのはソ連だと誤解してきた。そのために中国に対しては無防備で、中国の脅威が近年、誰の目にも明らかになるまで警戒心が薄かった。先述した六〇年安保に向けた中国共産党の工作も、「ソ連と連動していた」か、「ソ連が裏で操っている」と見る向きもあろうが、決してそうではないのである。

第二次大戦中のある時期、おそらくは一九四〇（昭和十五）年ごろ、ソ連が日本をはじめとする東アジアの革命運動を中国共産党に任せる、あるいは中国共産党がモスクワ中心のコミンテルンに代わって主導権を握る、という中ソ関係の変化が起きていたのである。

戦後に日本共産党の議長を務めた野坂参三が同年にモスクワから延安に活動の場を移したことが、この動きを象徴しているように思われる。

さらに、一九四二（昭和十七）年、中国共産党の根拠地だった延安にやってきたソ連の駐在官、ウラジミロフが書き残した回想録も、こうした中ソ関係の変化を指摘している。このころ中国内ではすでに、日本軍との戦いで疲弊する国民党を尻目に中国共産党が勢力を拡大しつつあり、中国共産党は日中戦争終了後の政権奪取への自信を持ち始めていた。毛沢東は、秘密警察のトップだった康生を使って「整風運動」を行い、党の指導権を握るためにソ連派と目される幹部たちを次々と粛清していた。

これを見たウラジミロフは、「私の知っている従順な中国共産党ではない」と驚き、整風運動の目的はソ連と絶縁し、さらにはソ連を打倒して共産主義の首座を手に入れる、あるいはアジアを昔の中華帝国のように支配するためではないか、と予想したのである（『延安日記』サイマル出版）。

そしてコミンテルンは表向き一九四三（昭和十八）年に解散し、ソ連がヨーロッパ、中東、インドの革命運動へとシフトしていく一方、日本、朝鮮半島、そしてベトナムをはじめとする東南アジア諸国の革命運動つまり共産化は中国共産党が主に担うようになったのである。一九四九（昭和二十四）年の中華人民共和国建国以降、この「中ソ分担構造」の中で、中国共産党

は着々と日本革命の手を打ってきたということが今日、見え始めてきているわけである。

昭和十四年に東大文学部を卒業して中央公論社に入った杉森久英という人物が、『大政翼賛会前後』という回想録に、当時の中央公論社内の様子をつづっている。それによると、社員には、ソ連を「初恋の国」「地上最初の社会主義国」として限りなき憧憬の目で見ていた隠れ左翼が多数いて、会社もそうと知りながら編集の仕事をさせていた。そしてそれは中央公論だけではなく、改造社や岩波書店もソ連最前線のインテリ編集者を多く抱え込んでいた。そして彼らが世に出した言論を抜きに、大政翼賛会を考えられないとしていた。つまり左翼が大政翼賛会をつくった、ということである。

ちなみに、大政翼賛会を熱心に推進したのは、近衛内閣の書記官長や司法大臣を務め、尾崎秀実とも親しかった風見章である。近年刊行された『風見章日記・関係資料』（みすず書房）を読むと、風見は左翼思想を捨て切らないまま政府の要職に就いていたことに驚かされる。そして戦後は社会党の国会議員となり、やはり、前述の「日中国交回復国民会議」や日中友好協会の要職も務めている。彼に戦前から中国共産党とながりがあったのかどうか。もし秘密の接触があったとすれば、大政翼賛会推進との関係はどうであったのか。いずれにせよ、戦争翼賛体制は「天皇制ファシズム体制だった」とか、「軍国日本への道」と批判する

戦後史家の議論は、左翼勢力自身が戦争体制の推進に果たした責任を隠蔽し、転嫁していることにほかならない。

話を戻すと、杉森が「ソ連」という言葉で意味したものの実体の多くは、実は多くの場合、延安ないし、中国共産党に対しての意識であったのである。しかし、それは当の日本の左翼たちにも隠されていたようで、今日まで誤解を生む原因になってきた。それだけ中国共産党の諜報活動は巧妙でデイーブだったのである。

こうした共産主義運動と工作ルートをめぐる誤解について言えば、コミンテルンを世界各国の共産党をとりにまとめていた国際組織だと思っている人がいる。日本共産党が「コミンテルン日本支部」と言われていたように、各国の共産党を寄せ集めたものがコミンテルンだというわけだ。しかし、そう考えるのはコミンテルンの役割の一部、あるいは「表の顔」しか見ていないのである。コミンテルンには「裏の顔」があり、そちらこそが歴史的に重要な役割を果たしていたのである。

その「裏の顔」とは、コミンテルン、モスクワに直結する形で各国において独自に一時には当該国の共産党指導部にも極秘にして組織された本場の「コミンテルン支部」があり、上海やサンフランシスコ、ベルリン、パリ、ロンドン、日本ではある時期、大阪に置かれていたことが分かっていた。そのメンバーたちは直接、ソ連の資金を使い、もっぱらソ連の立場に立つ

て各種工作を遂行していたのである。

例えば、「横浜事件」のきつかけとなった左翼評論家の細川嘉六もそうだったのでないか、と思われる。それゆえ当局がいくら調べても日本共産党との関係は立証できなかったのではないか。日本共産党とは関わらず、「コミンテルン直結」で活動していたとしたら、それも理解できる。尾崎秀実が昭和七年、上海から大阪朝日新聞社に転勤になると、細川に会いに行く。細川は当時、大阪・天王寺で、今日でも存在するよく知られた「〇〇社会問題研究所」という看板を掛けた施設に詰めていたが、これが本当のコミンテルン日本支部だったのである。

中国共産党は、こうしたコミンテルンの手法を受け継いで、世界各地、特に日本や韓国、台湾、東南アジア諸国に、延安、北京に直結する「中国型コミンテルン」あるいは「シナミンスターン」とでも言うべき一大諜報網を築いてきたのである。

郭沫若の日本緊急脱出と「南京大虐殺」

本号の特集「中共・ソ連・共産主義の戦争責任」では、日中戦争は、中国共産党が国民党と日本を戦わせることによって当面の国民党の圧力を回避しつつ、国民党を弱らせて最終的には政権を奪取するという大きな戦略を描いて仕掛けたものだったことが論じられている。中国共産党だけではなく、ナチス・ドイツの脅

威に直面していたスターリンにとっても、日本軍が国民党と戦うことで、日本軍の「北進」から逃れられるという決定的な利点があった。米英やドイツの思惑も複雑に絡み合っているが、日本人には明確な理由も分らないまま日中戦争が始まり、泥沼化していった背景に、この中国共産党やスターリンの壮大な「日中戦争誘導戦略」があったことは、今日、もはや疑問の余地もない明白な史実となっている。

実は、先述した南原繁の「媚中対談」の相手を務めた郭沫若が、日中戦争開戦当時に、不可解かつ重要な動きをしている。その背景を検証すると、日中戦争を仕掛け、日本と国民党を泥沼の戦争に引きずり込んだ中国共産党の戦略とびつたり重なりあってくる。

以下は、武継平・元立命館大学講師が、中国文芸研究会の雑誌『野草』（二〇〇六年二月一日、第七七号）に寄せた「郭沫若に対する日本の警察監視の実態——『日支人民戦線派諜報網』の検挙から」という論文を参考に、この時の郭の動きを検証していきたい。この論文は、「極秘外事警察概況」という資料をもとにしていて信頼性が高い。当時、日本の公安当局は、郭が中国共産党の秘密黨員であることを把握し、監視下に置いていたのである。

郭沫若は一九一四（大正三）年、日本に留学。約十年間日本に滞在する間に日本人女性と結婚している。その後いったん中国に帰国し、表面的には国民党に入り、国民革命軍総政治部の宣伝部長として蒋介石の北

伐に参加している。

その後、郭沫若は蒋介石を批判してにらまれ、一九二八（昭和三）年二月に日本に「亡命」と称して入国してきた。ところが、一九三七（昭和十二）年七月、盧溝橋事件の直後に、彼は極秘裏に日本を脱出して帰国したのである。公安当局の厳重な監視を逃れるため、彼は着流しのまま下駄履きで千葉・市川市の家を出て、偽名を使って神戸からカナダの汽船に乗り込み、日本を脱出するという緊迫感に満ちた脱出劇だった。

この秘密脱出を支援したのが、コミンテルンや中国共産党が日本国内で組織していた地下ネットワークだった。司令塔は、駐日中国大使館の一等参事官だった王芄生である。王芄生は戦時中は、中華民国（国民党）政府中央軍事委員会に属する「国際問題研究所」を創設して所長に収まり、対日諜報工作を仕切っていた。『正論』一〇二一年一月号で長塩守且氏が明らかにしているように、「国民党員」だと思われていた彼は実は秘密共産党員（コミンテルン系）であり、その事は「極秘外事警察概況」にも記され、その他の史料からも明確に実証されている。

郭の帰国には、蒋介石が出した逮捕命令を取り消す必要がある、日本に置いていく妻子の生活費の問題もあった。これらを国民党内で解決したのも王芄生であった。そして王が動いたということから、脱出計画は、王とつながっていた周恩来が直接指令していた可能性が強いことが分かる。

一方、日本で郭の脱出を手助けしたのが、やはり表向きは国民党員で、京都を中心に活動していた中国共産党秘密工作員の銭崖である。篆刻家の彼のもとには、作家の谷崎潤一郎ら有名文化人が続々と訪れていた。谷崎潤一郎は先に見た開高健と同じで、作品の傾向からして「なぜそこまで？」と思われるほど終始、中国に「入れ込んでいた」文学者の一人であった。一見、共産主義とは無縁に思える文化人ほど、意識的または無意識の協力者となった時の影響力が大きく、中国側の工作対象に選ばれやすいのであろう。

ほかにこの脱出劇に携わったのは、藤原豊次郎という無産医療運動に従事していた人物で、郭の脱出劇の後の一九三七年十二月、「第一次人民戦線事件」で検挙されるコミンテルン系の活動家である。そしてこの秘密工作には、佐野袈裟美という早稲田大学卒のプロレタリア文学作家も加わっていたとされる。昭和六年にプロレタリア文化連盟の中央評議員になり、一九三〇年代後半から「人民戦線派」の中堅となり、それまでも郭沫若や銭崖と頻繁に接触していた。彼は恐らく中共系コミンテルン（シナミンテルン）に特化した工作員だったと思われる。

中国共産党は国民党員に偽装したコミンテルンの王芄生を動かし、王が日本国内にいた隠れ中共党員の文化人、銭崖を使って、在日の中共工作網や中共系コミンテルンの秘密ネットワークの中から支援グループを組織したのである。

興味深いのは、中国共産党にはこの時、郭沫若を、いかなる危険を冒しても中国に帰国させる、という強固な意思があり、そのために日本国内の秘密ネットワークを惜しげもなく使ったことである。郭の帰国にあたってグループが連絡手段として使った手紙や電報は日本の警察当局によって検閲されており、郭自身はもちろん支援グループも危険にさらす可能性があった。しかし、それでも中国共産党は郭を帰国させたかったのである。なぜか。その理由を考える鍵となるのが、帰国後に彼が果たした役割と、日本を脱した一九三七年七月二十五日という日付であろう。

郭沫若は帰国後、国共合作政府の中央軍事委員会総政治部で宣伝を担当する第三庁の庁長になった。つまり、対日宣戦のために帰国を命じられていたのである。その裏には日中戦争の帰趨は宣伝によって決せられるという周恩来の確信があった。郭には、中国国内や東南アジアのみならず欧米でも反日世論を盛り上げることが可能なだけの影響力があり、日本には深刻な打撃を与えることができると考えられていたわけである。その目論見は見事に（日本にとっては大変不幸なことに）図に当たった。郭が行ったことは、「南京大虐殺」を最初に世界に広めたと言われる『戦争とは何か』（ティンパーリー著）の中国語版の序文を書くことだったのである。有名文化人の郭が書いたことで、この本は中国大陸のみならず北米の中国人社会で爆発的に読まれ、アメリカでの反日世論の形成に大きな役割を

果たしたのである。

次に、郭が日本を脱出した七月二十五日という日付に注目したい。脱出計画には、検閲を逃れるための隠語での手紙のやりとりや船の客室の手配など相当な準備期間が必要だった。ということは、七月七日の盧溝橋事件発生以前から脱出計画が本格始動していたということである。つまり、中国共産党が日中戦争の開始を決意し、開戦後は大規模な宣伝戦を展開するという明確な戦略に基づいて郭を帰国させたということである。盧溝橋事件後、戦闘の不拡大方針を決めた日本側の和平努力など、中共側の強固な対日開戦意思と綿密な開戦計画の前ではまったく意味がなかったと言えよう。

昭和八年の敗北

郭がこの時に中国共産党員だったということには、いまだに否定的な日本の中国研究者も多い。郭が入党したのは一九五八（昭和三十三年）年だとする中共党史という名の「公式情報」に基づけば学問研究が成り立つと誤解しているためだが、それこそ中共の「諜報空間」にはまり込んでいると言えるだろう。もしそれが本当なら、南原と対談した訪日時には党員でなかったことになる。あれほど重要な時期の訪日団代表が非党員だと信じろ、ということ自体に無理がある。

そもそも、郭が関与した「南京大虐殺」という大規

模かつ悪辣な虚偽宣伝は、国民党本来のやり口とは思えない。こうしたでっち上げは、いかにも「コミンテルンの」なのである。

一九三〇年代、ベルリンのコミンテルン秘密本部（OMS）を中心に、世界中に「反帝同盟」や「中国侵略に反対する市民連合」などの反戦フロント組織を構築した宣伝・謀略工作専門家のヴィリー・ミュンツェンベルクと、世界の諜報史を代表するソ連のスパイ・ゾルゲという二人の大物工作員を育て上げたカー・ラデックというコミンテルンの指導者がいる。

「嘘も百回言えば本当になる」というプロパガンダの有名な「格言」は、彼のものである。これはナチスの宣伝相ゲッベルスの言葉だと思われるが、誤りである。それはラデックが打ち出したコミンテルンの宣伝政策の基本コンセプトだった。そして、このラデックこそ一九二〇年代末に有名な「田中上奏文」をでっち上げ、世界に流布させた張本人である可能性が高い。

そのラデックのモットーは、「嘘は本当で本当は嘘。白は黒であり黒は白である」であった。形式論理学の常識世界を倒錯させた、情報と知性空間の「脱構築」状況を作り出すことが世界革命の成功に不可欠だと考えていたとされる、開高健らが見た、「チベット貴族・地主の圧政や虐殺から農民を解放した偉大な人民解放軍」の展示も、まさにこうした、真実を一八〇度転倒させたところに「革命的真実がある」とする「超

弁証法」の世界観に立っていたと言える。

ここで、歴史から見えてくる共産主義の諜報・謀略工作の本質について改めて考えておきたい。国際的な「友好交流」活動は、必ず何らかのスパイ活動と結びつくものであるが、情報収集の手法や情報の利用の仕方、相手をどこに向けていくのかという目的意識において、共産主義国・組織は極めて攻撃的なのである。

どこの国でも戦争に勝つか、それとも国が滅ぶかという瀬戸際になれば、陰謀にも謀略にも取り組むであろう。しかし共産主義は平和時でも「革命のため」という大義名分のもと、通常は戦争中にしかみられないような攻撃的な謀略工作、破壊活動、政治的陰謀工作を行うのである。そのため徹底的に非道徳的で人間性に反するやり方こそが「革命的」として称揚された。

不幸なことに、レーニンがロシアの陰謀主義的風土の中でこの路線を推し進めて後のKGBの基礎をつくり、スターリンがそれを驚くほど高度に洗練されたものへと仕上げ、コミンテルンを通じ、世界共通の左翼「進歩派」の文化にもなったのである。

中国共産党のインテリジェンス活動はこのコミンテルンに鍛えられ、国民党との闘争の中で、戦争中でしか許されないような謀略活動が常態化した組織体質を持つてしまった。そして、権力奪取に成功したことで、これが中国共産党の決定的な成功体験となつて、国家として諜報活動をさらに高度なものへと洗練していった。中国はこうした諜報活動に、今後さらにエネ

ルギーが注ぎ続けることはあっても、経済繁栄の時代も力を抜くことはあり得ないと考えられる。

現に近年、国共内戦の勝利は諜報活動の功績であり、前三傑、後三傑と呼ばれる国民党への潜入スパイたちを指導した周恩来を称賛する『隠蔽戦線統帥周恩来』のような本が相次いで出版されている。これは明らかに、中国共産党が中国の国民、一般党员に対して、「今後重要国策は諜報であり、秘密工作である」というスローガンを示していると考えられるのである。

日本脱出前の郭が、元老・西園寺公望と交流があったことは前述した。西園寺だけでなく犬養毅も、歴史家でもある郭の甲骨文字の研究書を愛読していた。そして本を贈られた西園寺はなんと、千葉・市川市の郭沫若の自宅を訪れていたのである。そして、それをマスコミが「愛妻の国に晴耕雨読」「著書を通じ園公（西園寺）の知遇、革命闘士の夢を捨てて」と書き立てている（東京朝日新聞昭和八年一月六日付）。日本の公安当局が、中国共産党やコミンテルンと「切れていない」と見て監視対象にしている人物に、「最後の元老」として日本の国家運営において最も力のあった時代の西園寺がわざわざ会いに足を運んでいるのである。はや昭和八年の段階において、日本は中国共産党に「戦わずして敗北」していたとも言えるが、この事は、日本人が上から下まで共産主義や中国の革命運動の本質、中共の諜報活動の深さをまったくわかっていなかった証拠だとも言える。

日本人はなぜ、共産主義陣営の諜報活動に対する感性が鈍いのか。たとえば戦前の日本外交を根本において大きく誤らせたと私が考える幣原喜重郎は昭和六年七月、広東政府という中国の地方政権・広東政府の外交部長だった陳友仁と日本の外務大臣として会談している。この際の幣原の発言にも、そのことがうかがえる。陳友仁から「中国の民族主義運動の中にソ連が浸透してきている」「中共はモスクワからの財政的な援助と指導を受けている。将来の中国に大きな害悪をもたらすから、一緒に取り締まろう」と言われた幣原は、「自分は露国の運動（コミンテルンの活動）はさほど恐れおらず。支那人といえども露国なる外国の『インフルエンス』により容易に支配されるものと思考せず」（『日本外交年表並主要文書』下巻、一七三七―七五頁）と答えている。当時、イギリスなどがソ連・コミンテルンの謀略に対して抱いていた鋭い危機感と比べ、なんとという甘さであったことか。

幣原は、中国での権益を守るために軍事力の発動も辞さなかった当時のアメリカやイギリスを「帝国主義的だ」と批判し、日本は中国に対しては厳格に「内政不干渉」を守り、たとえ合法的な利権が侵されても決して軍隊は出さないと、という姿勢を貫いた。しかし、まさにその結果、共産主義の指導する「排日」に追いつめられた末、陸軍の「暴発」としての満州事変を招き寄せたわけである。幣原外交の罪はきわめて重いと言わなければならない。

この「幣原の禍機」の背景には、彼の先の発言にみられるような観念的な共産主義への無警戒があったと言わざるを得ない。そして結果的に共産主義勢力が煽っていた排外的民族主義をさらに助長してしまったのである。中国共産党の諜報活動に好き勝手に支配されるのは、戦後の左翼特有の問題だとは言えないのである。西園寺や幣原らも含め日本の進歩派・開明派は戦前も戦後も一貫して、共産主義について、その隠された非道徳的・反道徳的本質を見抜けずに自らの左に連なる「同類」と見なす傾向が常にある。これは「日本の宿痾」であるかもしれない、つまるところ、真の自由主義というものを理解し得ない日本の知識人の質の問題なのかもしれない。

最後に、共産主義の謀略性、という一般的な命題に加えて、中国という国の政治・外交の歴史を貫く文明的特質としての「諜報・謀略伝統」の強さと凄さについて言及しておきたい。今日の世界において、各国の諜報インテリジェンス能力を私なりに「番付風」に概観してみると、「東の横綱」は間違いなく中国であり、「西の張出し横綱」がアングロサクソンである。英米が一緒になって辛うじて中国と均衡する力がある、とさえ言つてよいかもしれない。

ロシア、イスラエルは大関、閔脇クラス。インドは閔脇か小結、ドイツ、フランスやインド、オーストラリア、ブラジルは小結か前頭クラスであろう。イラン

やエジプトは、「アラブ的」伝統の諜報力があり、小結に近い。アジアに残る冷戦構造の最前線で対峙している韓国と北朝鮮、中国の脅威にさらされている台湾はやはり、閔脇かそれ以上のクラスといえる。翻って日本をみると、戦前は前頭か小結、暗号解読などの得意分野に限れば、閔脇程度の力はあったかもしれない。これに対し、「土俵に上がろう」という気ずらないのが戦後の日本である。

では今後、日本という国は、少なくとも見て国のGDPのおそらく数%をインテリジェンス活動に費やしているであろう中国共産党にどう対処すべきなのか。まず、日米安保体制が軍事にとどまらず、防諜面でも日本にとつての生命線であり、この点でも日米関係が日本の存立に不可欠だという認識を、改めて明確に持つことが必要である。さらに大切なことは、「もはや遅すぎる」とはいえ、それでも尚、日本が自らしっかりと中国の諜報活動を監視することができるよう、実質的な努力を積み重ねていくことである。中国共産党とその政権は絶対に「裏の顔」を失わない強固な特質があることを片時も忘れてはならない。このことを忘れると、たとえば尖閣や東シナ海の問題で中国を押し返しても、結局、日本は内側からやられてしまうからである。この「日本の宿痾」を克服しない限り、この国の存立は到底、望めるものではないことを、この際、深く銘記すべきであろう。